

ドイツ語の制御構文・繰り上げ構文の 不定詞句の扱いについて

論文

甲斐崎 由典

早稲田大学教育学部（編）

『学術研究 ―外国語・外国文学編―』第47号

43～61頁

1999年2月25日発行

（この抜き刷りの頁割りは実際に出版されたものと異なります）

ドイツ語の制御構文・繰り上げ構文の不定詞句の扱いについて

甲斐崎 由典

1. はじめに^{*}

いわゆる制御構文や繰り上げ構文において、不定詞句の意味上の主語をどのように割り出すか、あるいはこの意味上の主語を文の統語的な分析、すなわち構文解析においても必要なものとして、音形は持たないがれっきとした文肢として考えるかどうかについては、枠組みとする言語理論に関わらず、長らく議論が繰り広げられてきた。

この問題に関して、筆者は拙論(1998)では、伝統文法の考え方なども考慮に入れた上で、主辞駆動句構造文法¹での制御構文や繰り上げ構文の構文解析の場では、意味上の主語という文肢を排除する方向で論を進め、不定詞句を文に取り込むために、不定詞句を名詞句に変換するという語彙規則を提案した。

しかしながら、本来動詞句になりそうなものをいきなり名詞句に変換することは、理論全体の名詞句記述に不必要な例外を持ち込むようでもあり、また拙論(1998)では従来から詳しく研究されている構成の制御構文や繰り上げ構文を扱っていないこともあり、本論ではその不十分さを補うために、そうした「一般的」な制御構文と繰り上げ構文も分析対象に含めた上で、この語彙規則に再検討を加えてみることにする。

2. 本論で扱う不定詞構文

用語の説明も兼ねて、本論が対象とする不定詞構文を例文と共に挙げる。本

^{*} 本論は、1998 年度特定課題研究助成費（研究課題「主辞駆動句構造文法(HPSG)による現代ゲルマン語の構文解析の実際」）による研究成果の一部をまとめたものである。

1 （独）kopfgesteuerte Phrasenstrukturgrammatik、（英）head-driven phrase structure grammar。以降「主駆文法」と略す。

論に特に関係する部分は、例文のすぐ次の行に括弧で括って筆者が抜き出して
おいた。

2 . 1 . 制御構文

一般に制御² 構文と呼ばれ、今まで詳しく研究されてきたのは次のような構
文である。

- (1) Schwester Monika, die lustigste, versprach ihm, den Brief von der
Nachtwache mitzunehmen, dann komme er heute noch an. (Muschg: 344)
[Schwester Monika versprach ihm, den Brief mitzunehmen.]
- (2) Er schrieb ihr nichts davon, hatte trotzdem immer Angst vor einem Besuch,
oder noch schlimmer, einem Brief an die falsche Adresse; also schrieb er,
sobald ihm die Wunde erlaubte etwas aufzusitzen, selbst einen Brief.
(Muschg: 343)
[Die Wunde erlaubte ihm, aufzusitzen.]

制御構文の特徴のひとつとして、(意味的に解釈して割り出した)不定詞句
の意味上の主語である存在は、親文³ と不定詞句では異なる意味役割を担っ
ていることである。(1)ではそのような不定詞句の動作主が親文では主語である
ので主語制御、(2)では(与格)目的語であるので目的語制御と呼ばれるが、この
区別は親文の動詞によって一意的に決まるわけではなく、意味的・言語運用論
的要因⁴ がかなり重要であることに注意するべきである。

- (3) Der Gast bestätigt dem Kellner, ihm kein Trinkgeld gegeben zu haben.
(Hoeing: 29)
[dass der Gast dem Kellner kein Trinkgeld gegeben hat]

2 (独) Kontrolle、(英) control.

3 本論では、不定詞句を何らかの形で含む文において、統語的に直接、すなわち構文木
で考えた場合に最初にこの不定詞句を包括する文を「親文」と呼ぶことにする。

4 この問題に関しても多数の研究が存在するが、対象言語をドイツ語とするものでは
Abraham、Fujinawa、Köpcke/Panther、Wegener などが挙げられよう。

- (4) Der Gast bestätigt dem Kellner, ihm die Soße unabsichtlich über den Anzug gegossen zu haben. (A.a.O.)
[dass der Kellner dem Gast die Soße unabsichtlich über den Anzug gegossen hat]

2 . 2 . 名詞修飾構文

「名詞修飾構文」という名称は筆者によるものだが、不定詞句が親文に含まれる名詞句に意味を添える構文である。

- (5) Der Konkurs, die Notwendigkeit, sich neue Lebensmöglichkeiten zu verschaffen, hatten ihn gezwungen, ein anderes, verwandtes Problem in Angriff zu nehmen. (Dominik: 18)
[... die Notwendigkeit, sich neue Lebensmöglichkeiten zu verschaffen, ...]
- (6) Es fand dann irgendeine kleine Schauspielerei statt, die den Zweck hatte, sie an seine Müdigkeit zu erinnern, keine erhebliche, die sie beide betraf, nur die allgemeine von vorhin. (Muschg: 336)
[... den Zweck, sie an seine Müdigkeit zu erinnern, ...]

この場合、不定詞句が係っているのが、元々文とは全然構造の違う名詞句であることから、親文内に不定詞句の意味上の主語に当たる存在が見あたらない場合⁵も多い。

2 . 3 . 相関詞構文

文体上、「長ったらしい」不定詞句が親文の均整を崩さないように外置された構文として、変形を重視する生成文法ではよく研究されてきた構文である。

- (7) Sie spürte, daß es ihr schwerfiel, sich zu konzentrieren. (Gercke: 18)
[es = sich zu konzentrieren]

5 Pollard/Sag (1994)も 290 頁で、類似の構造の英語の文を、親文に不定詞句の意味上の主語がない制御構文の例として言及している。

- (8) Es scheint daher absolut vernünftig, anzunehmen, daß wir im nächsten oder übernächsten Jahrhundert in der Lage sein werden, ein Zehntel mehr zu erreichen. (Däniken: 15)

[es = anzunehmen, daß ...]

またこの構文は、不定詞句の意味上の主語が親文内にない制御構文の例として挙げられることも多いが、筆者は次の理由から本論では制御構文とは別種の不定詞構文として考えたい。

まず、(筆者の分類での)制御構文とは異なり、この構文では親文に不定詞句を参照している相関詞 *es*⁶ がある、すなわち親文内の文肢だけで、親文の動詞が要求する下位範疇化項目が揃っている、ということである。

また、(7)のように、不定詞句の意味上の主語と考えられるものが親文に含まれていても、それが親文で担う意味役割は、制御構文の場合と異なり、動作にどのように関わるか、というよりはかなり話法 (Modalität) 的なものである、ということである。そのような話法的な意味役割は、例えば次のような例では明らかであろう。

- (9) Sie war gerade dabei gewesen, mit der Serviererin im Spielsalon anzubändeln, als die Feuerwehr die Straße entlanggerast kam. (Gercke: 15)

この例では相関詞 *es* が前置詞 *bei* と結びついて *dabei* になっているが、不定詞句の意味上の主語である親文の先頭にある *sie* は、何らかの動作に関わったというよりは、外部から「彼女」の状態がどうであったか表現するためのものである。

以上のことから、筆者はこのような構文をあえて制御構文とは別の項目を設

6 本論では、このような構文での *es* が相関詞か填辞 (Platzhalter) かの議論に踏み込む余裕がないが、不定詞句と結びついた *es* は文頭以外の位置でも消えないことから、ここでは相関詞としておく。人見などを参照。

(i) Nun, dann ist es unsere Sache, Ihnen diese kurze Zeit recht angenehm zu machen.

(Dominik: 14)

(ii) Erst den stillen Künsten Mamas, gewissen kränkenden Anspielungen auf die veränderten Verhältnisse und Sitten, auf die allgemeine Emanzipation und auf Francinens baldige Ehe war es gelungen, den Vater zum Verzicht auf sein Interdikt zu bewegen. (Werfel: 355)

けて分類することにしたが、親文の話法性から言えば、この構文は次項の繰り上げ構文に近いとも言える。

2.4. 繰り上げ構文

一見制御構文かと思われるが、詳しく見ると特異性がいろいろあるということとで、この繰り上げ⁷構文も今まで詳しく研究されてきた。

(10) Das Leben schien sie bescheiden gemacht zu haben, zur Teilnahme fähig.

(Muschg: 334)

[Das Leben hatte sie bescheiden gemacht, ...]⁸

(11) Das war unangenehm, und es schien ihnen eine Ewigkeit zu dauern, bis der Wagen wieder auffuhr und sich langsam entfernte. (Gercke: 11)

[Es dauerte eine Ewigkeit, bis ...]

繰り上げ構文⁹の主な特徴のひとつとしては、制御構文と異なり、不定詞句の意味上の主語が文全体でひとつの意味役割しか担わないことが挙げられる。この点については前項でも述べたが、親文で主語になっているものは不定詞句の動詞からしか意味役割を担わず、親文では単に話法的な叙述の対象として存在しているように考えられる。ただし、この繰り上げ構文では、文内に不定詞句の意味上の主語が必須であり、しかもその存在は親文で主語になっていなくてはならず、前置詞句などの形で間接的に組み込まれていてはならない¹⁰、という特徴があり、まさに不定詞句から主語が親文に「繰り上がる」構文と言えよう。

この他にも、特に制御構文と比べた場合の繰り上げ構文の特異性については

7 (独) (An-)hebung, (英) raising.

8 本項では、例文の次の行の括弧内には、話法的な叙述を取り除いた文の内容を出した。

9 繰り上げ構文で、親文の主語の位置に繰り上がる文肢は、別に不定詞句の意味上の主語に限らないが、本論では制御構文との対比のために、不定詞句から意味上の主語が繰り上がったものだけを念頭に話を進める。

10 制御構文では可能である。

Dr. Orlow hat sich mit mir und auch mit anderen Fachleuten vergeblich bemüht, eine bessere, einigermaßen wissenschaftliche Erklärung zu finden. (Dominik: 9)

多くの研究が様々な特徴を挙げているが、それについては後述する。

3 . zu-不定句化語彙規則

さて、拙論(1998)で述べたように、動詞が主辞である節から、それが文として実現されれば必須である主語が必要なくなるようにするには、単一化の前に予め語彙項目を変更するしか方法がないと思われるので、本論でも次のような語彙規則を考えることにする。

(12) zu-不定句化語彙規則

$$\left[\begin{array}{c|c} \text{CAT} & \text{HEAD} \left[\begin{array}{cc} \text{VFORM} & \text{inf} \\ \text{SUBJ} & < \text{NP} > \end{array} \right] \end{array} \right] \longrightarrow \left[\begin{array}{c|c} \text{CAT} & \text{HEAD} \left[\begin{array}{cc} \text{NFORM} & \text{zu-inf} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

この語彙規則に出てこない素性は全て変換後も変わらないものとする。

拙論(1998)からの変更点としては、動詞が定形になったときに必要となる主語を、動詞が不定形の場合は SUBCAT 素性ではなく、HEAD 素性に SUBJ 素性として含め、動詞が定形になったときに主語が SUBJ 素性から SUBCAT 素性に移る考え方¹¹を採っていることである。

制御構文や繰り上げ構文などの不定詞構文への不定詞句の組み込みを問題としている本研究では、この SUBCAT 素性からの主語分離説採用の直接の根拠は示すことができないが、逆に、動詞が不定詞句になると（音形を持つ）主語が不要になる事実と、不定詞句を親文に組み込むために必要と考えられる品詞変換を表そうとする語彙規則が、ひとつの HEAD 素性値の変更だけで簡潔に表せるとすれば、それも SUBCAT 素性からの主語分離説を支持する根拠のひとつとなると言えるかもしれない。

11 ドイツ語に関しては、Kiss (1995)の 78 頁以降、Kiss (1994)の 77 頁以降、Kathol (1994)の 242 頁以降、Pollard (1994)の 276 頁以降を参照。

また、この語彙規則が変更を加えない素性値として、当然 CONTENT 素性もあるわけだが、この語彙規則によりひとつ主語という項が消えると、CONTENT 素性値に穴が開いておかしいことにはならないか、という懸念がある。しかしながら、これは既に主駆文法では定着している受動化語彙規則についても同じことが言えるわけで、この辺りは今後の主駆文法全体の形式化を進めていく上で考えるべきことと思われる。

現段階では筆者は、単一化の占める役割が大きい主駆文法でも、意味に関係するような素性値は、いつでもきれいに決定されるとは限らず、むしろ制御構文の場合は、主語が除かれたことで取り敢えず空いている CONTENT 素性の項に、意味の分析により割り出された不定詞句の意味上の主語(の指す実体)が、「必要とあれば」入るようにしてはどうか、と考えている。これもまた制御構文では不定詞句の意味上の主語は統語的には全く不要だが、意味的・言語運用論的には必要、あるいは想定可能、という発想に繋がるものである。

最後に、そもそも zu という語をどのように扱うか¹² であるが、繰り上げ構文と関連して後述するように、zu が動詞の不定形に付けば必ず(12)の語彙規則が適用されて親文に組み込まれるとは考えにくいので、ここでは zu とは別に語彙規則を立て、動詞の不定形に zu が付くことがこの語彙規則適用の一前提である、と考えることにして、zu そのものの扱いについては今後の研究課題としたい。

4．各構文の解析例

以下に、(12)の語彙規則を適用した不定詞句と親文の単一化の概要を示す。

4．1．制御構文

(1)の文を簡略化した(1')で考える。

(1') Sie versprach ihm, den Brief mitzunehmen.

12 Pollard/Sag (1994)では、英語の不定詞句における to を助動詞の一種として記述している。

まず、ふたつの動詞の不定形は次のように記述され、

(13) mitnehmen

CAT	HEAD	VFORM	<i>inf</i>
		SUBJ	< NP[<i>nom</i>]: 1 >
	SUBCAT		< NP[<i>acc</i>]: 2 >

CONTENT	RELATION	<i>mitnehmen</i>
	ARG1	1
	ARG2	2

(14) versprechen

CAT	[	HEAD	[		]	]
			VFORM	<i>inf</i>		
			SUBJ	< NP[<i>nom</i>]: 3 >		
			SUBCAT < NP[<i>dat</i>]: 4 , NP[<i>zu-inf</i>]: 5 >			

CONTENT	[	RELATION	<i>versprechen</i>	]	
			ARG1		3
			ARG2		4
			SOA-ARG		5

不定詞句として親文に組み込まれる不定形(13)に語彙規則(12)を適用すると次のようになり、

(15) mitzunehmen

CAT	HEAD	NFORM	zu-inf
	SUBCAT	< NP[acc]: 2 >	
CONTENT	RELATION	mitnehmen	
	ARG1	?	
	ARG2	2	

目的語と単一化した不定詞句全体は次のように表せる。

(16) den Brief mitzunehmen

CAT	HEAD	NFORM	zu-inf
	SUBCAT	< >	
CONTENT	RELATION	mitnehmen	
	ARG1	?	
	ARG2	2	

(den Brief)

一方、親文の不定形はまず定形として次のようになり、

(17) versprach

CAT	HEAD	VFORM	<i>fin</i>
		SUBJ	< >
		SUBCAT < NP[nom]:[3], NP[dat]:[4], NP[zu-inf]:[5]>	

CONTENT	RELATION	<i>versprechen</i>
	ARG1	[3]
	ARG2	[4]
	SOA-ARG	[5]

親文全体は次のようになり、

(18) Sie versprach ihm,

CAT	[	[	HEAD	[		]	]	]	
				VFORM	<i>fin</i>				
				SUBJ	< >				
				SUBCAT					< NP[zu-inf]:[5]>
CONTENT	[	[	RELATION	<i>versprechen</i>		]	]	]	
				ARG1	[3]				(sie)
				ARG2	[4]				(ihm)
				SOA-ARG	[5]				

最終的に文全体としては次のように単一化すると考えられる。

CAT $\left[\begin{array}{l} \text{HEAD} \left[\begin{array}{ll} \text{VFORM} & \textit{fin} \\ \text{SUBJ} & < > \end{array} \right] \\ \text{SUBCAT} & < > \end{array} \right]$

CONTENT $\left[\begin{array}{l} \text{RELATION} \textit{versprechen} \\ \text{ARG1} \quad \boxed{3} \\ \text{ARG2} \quad \boxed{4} \\ \text{SOA-ARG} \left[\begin{array}{ll} \text{RELATION} & \textit{mitnehmen} \\ \text{ARG1} & \boxed{?} (\boxed{3}) \\ \text{ARG2} & \boxed{2} \end{array} \right] \end{array} \right]$

(sie)
 (ihm)
 (den)
 Brief)

4.2. 名詞修飾構文

しかしながら、筆者はまだ主駆文法における付加の考え方を、不定詞句が名詞句を修飾する場合にどのように適用できるか、あるいは適用すべきか現在検討中であるので、ここで前項のように文全体の単一化の様子を示すことは控

11

えておくことにする。

現在までのところ筆者は、(12)の語彙規則適用後の不定詞句が、修飾している親文の名詞句と単一化して変化をもたらすのは、既に飽和している SUBCAT 素性ではなく、CONTENT 素性の方で、概略は次のような単一化になると考えている。

(20) 名詞修飾構文における CONTENT 素性

$$\left[\text{CONTENT} \left[\begin{array}{ll} \text{INDEX} & \boxed{1} \\ \text{RESTRICTION} & \{ \boxed{2} \} \quad \boxed{3} \end{array} \right] \right]$$

名詞修飾構文が、不定詞句の付加の一種であるとした場合、今まで行われている考え方に従えば、付加のときは付加する句がそのために必要な素性、すなわち MOD 素性などを持たなければならず、その際は(12)の語彙規則に変更を加える必要が出てくると考えられる。

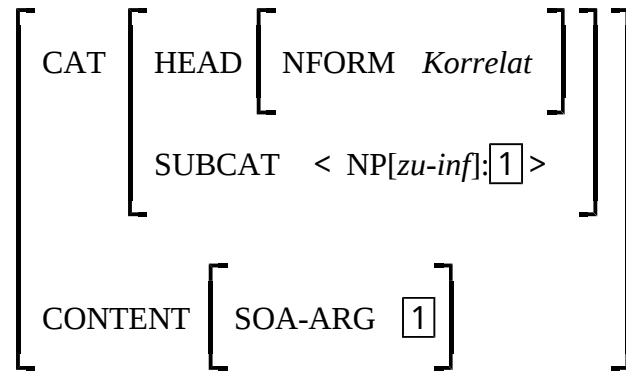
4 . 3 . 相関詞構文

相関詞構文については、主駆文法では今まであまり詳しく扱われてきたとは言い難く、Pollard/Sag (1994)の 145 頁以降で触れられている程度である。ここでは、親文の動詞に適用して、SUBCAT 素性の中で相関詞を前に追加し、不定詞句など外置されるものは後に並べ替える語彙規則が示されているが、この語彙規則は項の順序の入れ替えを指定するという意味では、ある種の変形操作の感を免れないと思う。

3.3.項でも述べたように、ドイツ語の相関詞構文の相関詞は、填辞とは異なり文頭でなくても消えたりしないので、同書で提案されているような語彙規則を導入するのではなく、最初から相関詞には相関詞らしい語彙項目を考えることにしてはどうかと考えている。

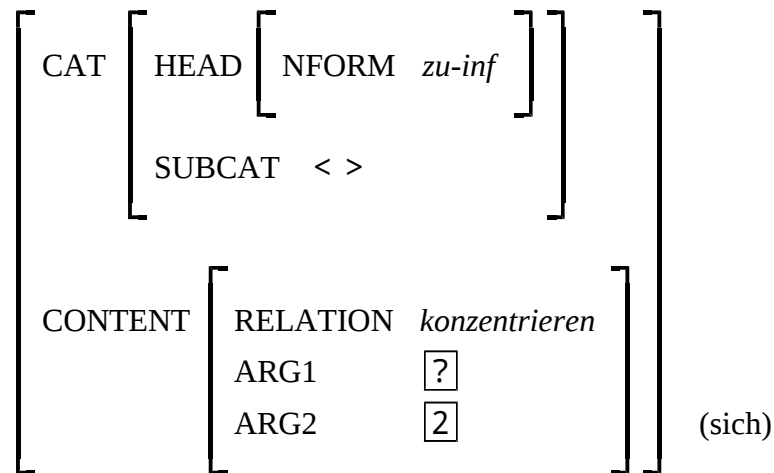
具体的には、相関詞はまず不定詞句と単一化するように指定し、またその結果意味的な情報も受け継ぐようになると考える。

(21) es



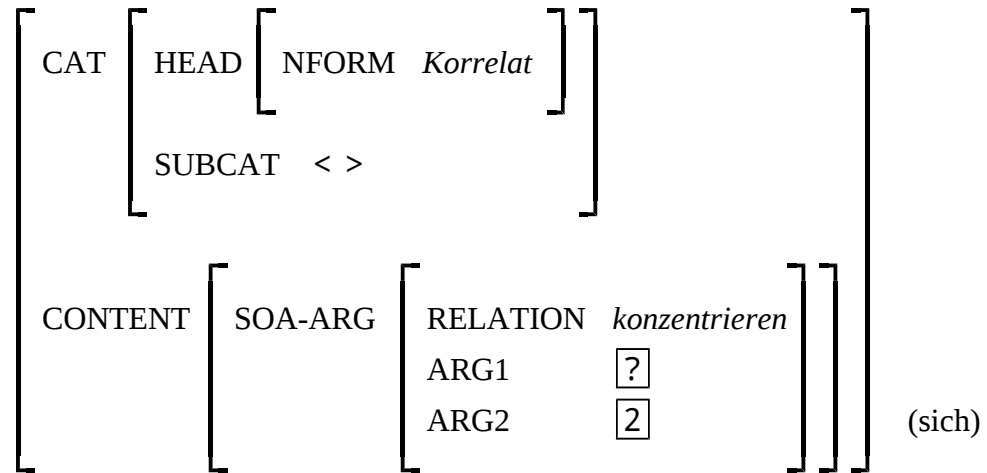
ここで(7)を例¹⁴に取れば、以下のように単一化が進むであろう。

(22) sich zu konzentrieren

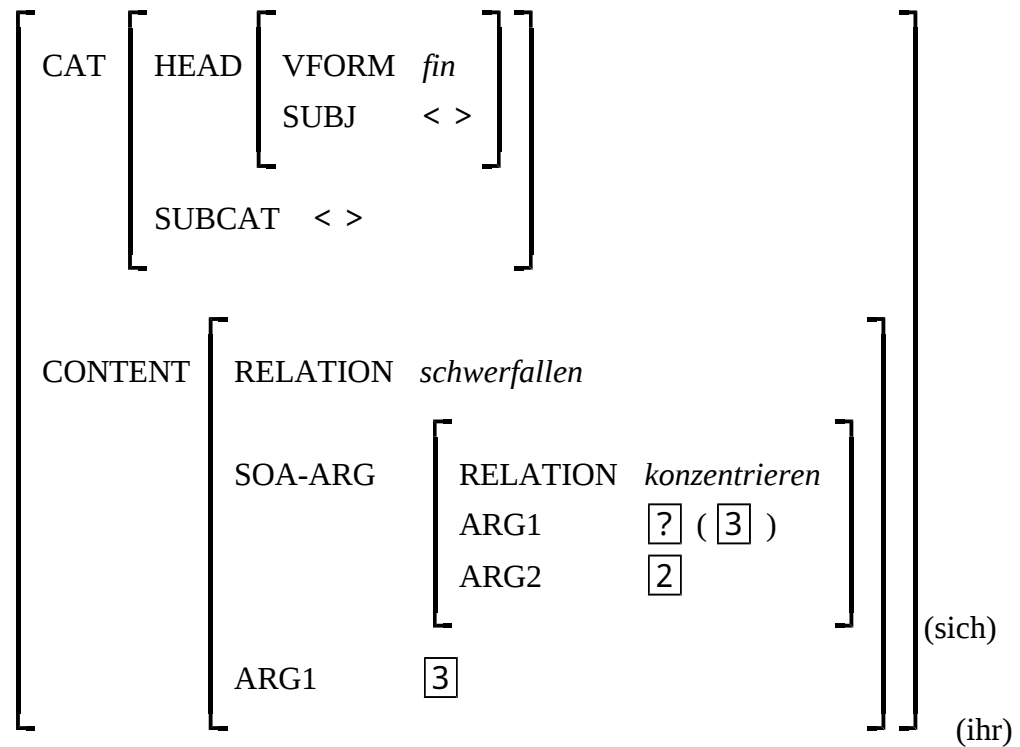


14 本来は再帰代名詞のような照応表現にはもっと詳しい語彙記述が必要であろうが、ここでは便宜上名詞と同じく単純な項としておく。これは後の 4.4.でも同じである。

(23) es ((22)との単一化後)



(24) (daß) es ihr schwerfiel, sich zu konzentrieren



不定詞句の第1項の扱いに関しては4.1.と同じに考える。

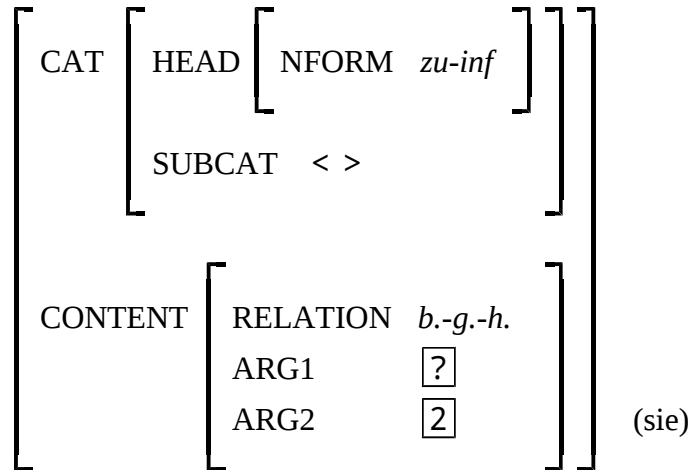
4 . 4 . 繰り上げ構文

一見繰り上げ構文は、形式的には制御構文と同じなので、名詞修飾構文や相

関詞構文のときに考えたような工夫も特に必要なさそうであるが、実際に単一化を試みてみるとどうなるであろうか。

ここでは(10)を例にとって考えるが、見やすさのために不定詞句の動詞は *bescheiden-gemacht-haben* (b.-g.-h.)のようにまとめて考えてしまうことにする。すると、不定詞句は全体として次のようになる。

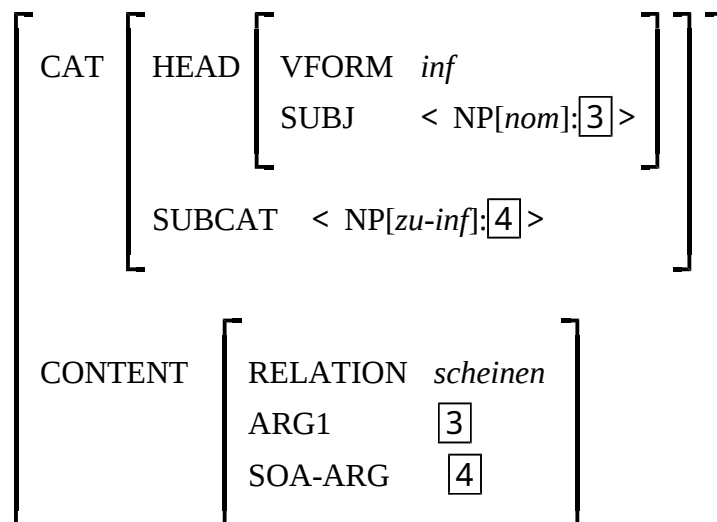
(25) *sie bescheiden gemacht zu haben*



さて、親文の方であるが、ここで *scheinen* の語彙記述をどのようにするか考える必要がある。

制御構文と同じように、

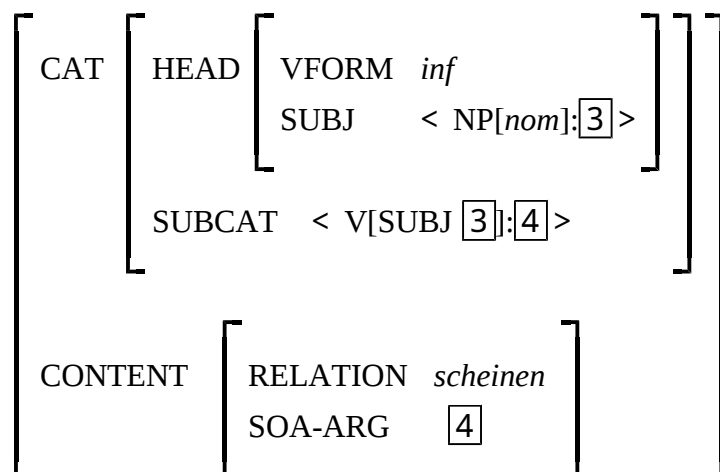
(26) *scheinen* (本論での仮定)



とすると、ここでの CONTENT 素性の解釈としては、第 1 項が SOA 項に記述されている事態を「呈して」いる、とでもなるうか。

一方、今まで繰り上げ構文を扱う場合には、大抵の研究¹⁵では scheinen は次のように語彙記述されているが、

(27) scheinen (従来型)



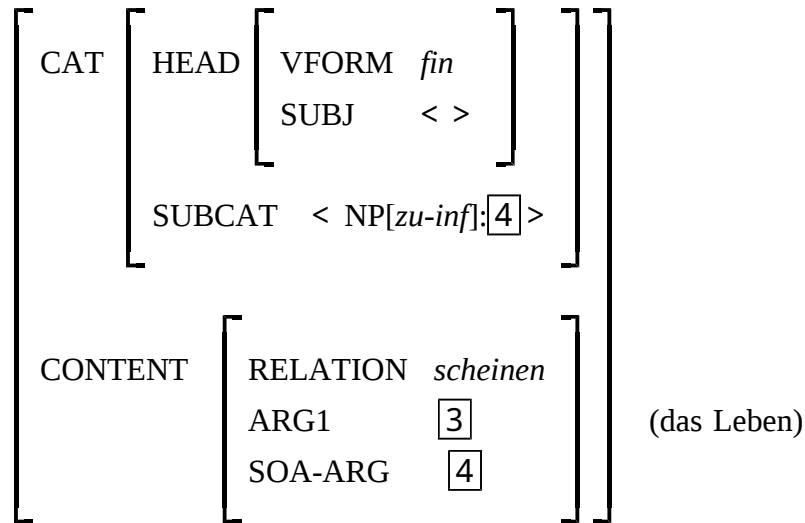
これは親文の主語が不定詞句に「繰り下がり」、不定詞句という動詞句に主語が加わって「擬似的な」文ができあがり、その文が記述する事態が「呈されている」ことを親文が表す、という考え方であろう。

確かにこの従来の語彙記述の方が、繰り上げ構文では親文の主語は親文では意味役割を担わない、すなわち CONTENT 素性に項として出てこないことを明確に表しているので、scheinen という動詞の話法記述性によく即していると言えるかもしれない。

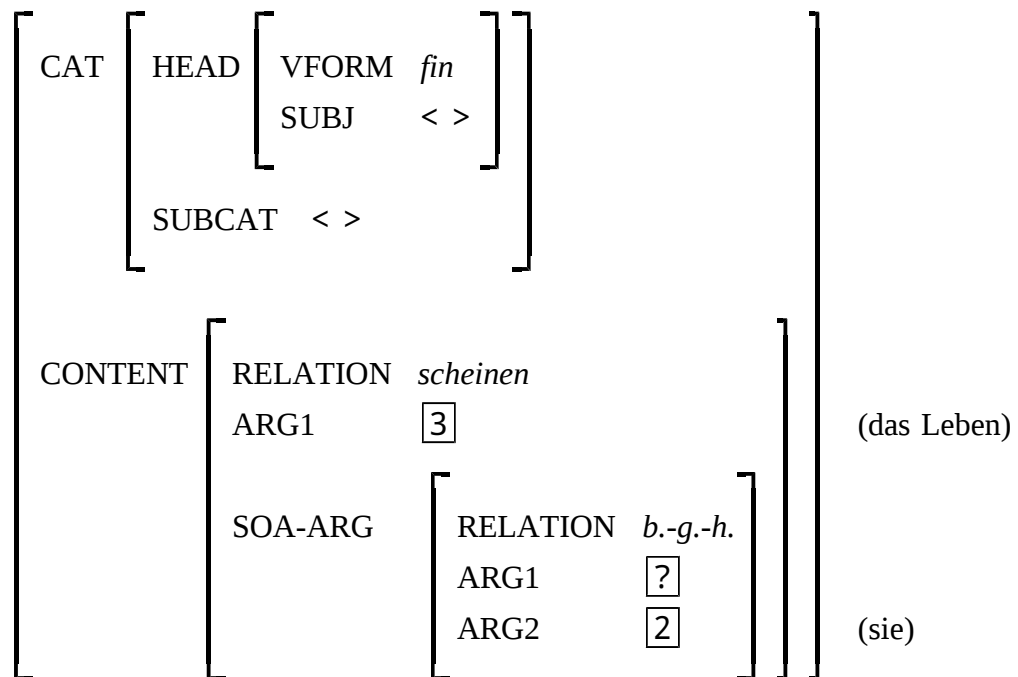
しかしながら、本論では不定詞句は語彙規則(12)で変換されてから親文に取り込まれることを前提に話を進めており、親文に組み込まれるのは動詞句ではないと仮定しているので、ここでは(26)から先を続けてみよう。

15 ドイツ語に関しては、Kiss (1995, 1994)、Borsley/Suchsland (1997)を参照。

(28) das Leben schien



(29) Das Leben schien sie bescheiden gemacht zu haben.



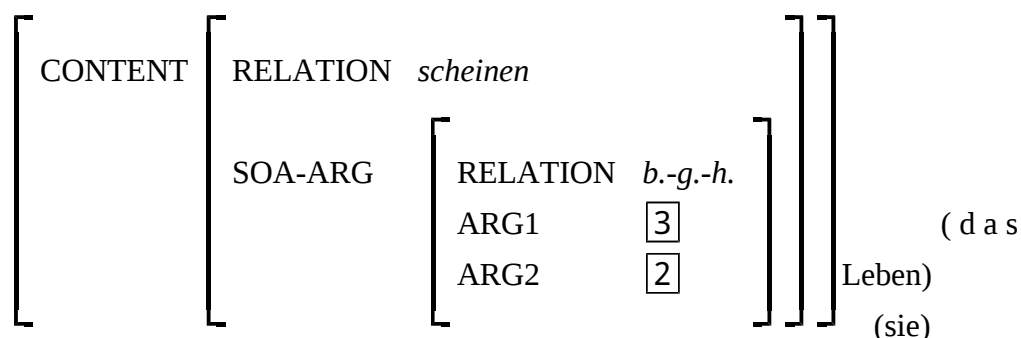
ここまでで統語的には単一化が終了したようであるが、(29)の CONTENT 素性を見ると、意味的にはうまく単一化できていないことがわかる。

本論で仮定した *scheinen* の語彙記述(26)に従ってその CONTENT 素性を解釈すれば、親文の主語3が、不定詞句の目的語2が *b.-g.-h.*という RELATION に置かれているという状況を呈示している、とでもなろうが、このままでは2を *b.-g.-h.*という RELATION に置いた主体が不明である。そこで制御構文のように

意味的に割り出して[?]で示されているところを[3]にする解決法が考えられるが、そうすると繰り上げ構文では親文の主語は文全体でひとつの意味役割しか担わない、という事実と反することになってしまう。となると、やはり親文で主語である項に何らかの意味役割を担わせる(26)のような語彙記述に問題がある、ということになるのだろうか。しかしながら、本論のように不定詞句は(12)のような語彙規則によって、主語項が不要な句に変換されてから親文に取り込まれると考えた場合、もともと(27)のように記述された語とは単一化できないであろう。

ひとつの解決案として、(29)のような語彙記述が得られた後に、親文に由来する第1項をそのまま SOA 項の中に移動し、

(30) 移動後の CONTENT 素性値



のように CONTENT 素性の値を変更するという何らかの手続きを考え出す、ということが考えられそうであるが、そんな方法はあまりにもその場しのぎのやり方と思われるし、単一化の過程で情報がどこかに吸い込まれるような手続きは主駆文法としては仮定したくないところであろう。そもそも、「移動」という考え方自体が主駆文法とは相容れない概念ではないだろうか。

問題を整理すると、繰り上げ構文の分析では(26)のような *scheinen* の語彙記述がおかしいか、語彙規則(12)による不定詞句の変換という発想がおかしいか、ということになろう。しかしながら、(12)による不定詞句の変換を前提とした場合、繰り上げ構文の構文解析を行うには *scheinen* などの親文の動詞を(26)のように記述せざるを得ないわけで、結局は語彙規則(12)による不定詞句の変換という発想に問題があることになる。

そうすると(12)のような語彙規則を前提とする、本論でのその他の構文の分析にも疑問が出てくることになるだろうが、筆者としては始めに述べたように、問題の核心は本論で扱った他の3種類の構文と繰り上げ構文の根本的な違いにあると考える。

繰り上げ構文の（制御構文と比べての）特殊性に関しては、従来から様々な事実が挙げられており、文全体で主語の担う意味役割がひとつしか考えられないことについては既に述べたが、他にも Bech の詳細な研究以来定着した概念である「結束性（Kohärenz）」に関しても違いがある。

ドイツ語やオランダ語¹⁶は、同じ西ゲルマン語でも英語とは異なり、定形の位置さえ正しければ、その他の文肢の位置は比較的自由である。そして、オランダ語では少し自由度があるとはいえ、これらの言語では従属節においては定形は節末に来ることになっているので、当然それ以外の文肢は定形の前に並ぶはずである。ところが、この場合制御構文と繰り上げ構文では不定詞句の位置の制約が異なるのである。

(31a) dass er wünscht, endlich zu schlafen

(31b) dass er endlich zu schlafen wünscht

(31c) *dass er scheint endlich zu schlafen

(31d) dass er endlich zu schlafen scheint

(32a) dat hij besluit aan een proefschrift te werken

(32b) dat hij aan een proefschrift besluit te werken

(32c) *dat hij blijkt aan een proefschrift te werken

(32d) dat hij aan een proefschrift blijkt te werken

すなわち、a と b を付けた制御構文の例では、不定詞句を文末の定形よりもさらに後に出したり、あるいは文肢のひとつとして定形の前に置いてもよいが、c と d を付けた繰り上げ構文では、不定詞句を定形の後に出すことは許されない。

このような繰り上げ構文の制約は実は話法助動詞と全く同じものであり、

(31e) *dass er will endlich schlafen

(31f) dass er endlich schlafen will

16 オランダ語では結束性に対応する術語はないようであるが、例えば Geerts et al. の 531 頁以降では、結束性を要求する動詞を *groepsvormend*、そうでない動詞を *niet-groepsvormend* な動詞と呼んでいる。

(32e) *dat hij moet aan een proefschrift werken

(32f) dat hij aan een proefschrift moet werken

不定詞句を定形の後に出せない、ということはすなわち定形と不定形の結びつきが強い、ということで、定形となっている方の動詞を指して、その動詞には不定形との結束性がある、という。

この結束性については Bech や Kiss (1995)などの詳細な研究があるのでここではこれ以上立ち入らないが、このように不定形が結束性を持つ繰り上げ構文や話法助動詞構文は、意味的にも「話法」を記述する¹⁷、という共通点¹⁸があり、これは主駆文法の語彙記述によれば CONTENT 素性に SOA 項だけを置くことで表されるものである。

このように考えてくると、本論で行った繰り上げ構文の分析に関しては、scheinen の語彙記述(26)を問題視することになる。だとすれば、前述した通り、不定詞句を親文に組み込むために考え出した語彙規則(12)が適用できないことになるので、繰り上げ構文の不定詞句には別の手続きを考えなければならないことになる。

ここで、もう一度従来から行われている scheinen の語彙記述(27)を見てみよう。(27)の特徴は、不定詞句を動詞句のまま組み込み、親文の主語は統語的にも意味的にも不定詞句にまわす、というものであるが、確かにこちらの方が繰り上げ構文にはふさわしいようである。

まず、前述したように(意味的な)主語も揃った動詞句全体が記述する内容を CONTENT 素性の SOA 素性にひとつの項として表すことができ、繰り上げ構文では文の主語には意味役割がひとつしかない、という事実ともうまく噛み合うと言えそうである。

また、本論では人称・数・格などの情報の扱いについては議論しないが、ゲルマン語でも格形が割とはっきりしているドイツ語やアイスランド語で観察できるように、繰り上げ構文では、統語的に見ても親文の主語は不定詞句との結びつきが強いという事実は、

(33) Ihm scheint geholfen zu werden. (Ebert: 178)

17 ここでは話法助動詞のいわゆる主観的用法の場合を考える。

18 ドイツ語では、繰り上げ構文を構成する scheinen、pflegen などの話法助動詞との統語的・意味的共通性から、これらの動詞を半話法助動詞 (Halbmodalverb) と呼ぶこともある。

(34) Drengnum virðist ganga vel við vinnuna. (Andrews: 204)

scheinen を(27)のように語彙記述すれば説明可能となるし、同じように繰り上げ構文では、不定詞句が要求する主語は制御構文と異なり必須であることも説明できそうである¹⁹。

そうした場合、同じ zu が付いた不定詞句の扱いが、親文の動詞によって異なることになるが、先送りにした一連の不定詞構文での zu という語自体の扱いを考える上で、このことは考慮すべきことのひとつとなろう。ただし、このような話法助動詞に近い動詞というのは、いずれのゲルマン語でも相対的に数は少なく、また不定形に zu のような語を付けなくてもいい場合があることも付記しておく。

5．まとめ

本論では、制御構文では不定詞句の意味上の主語の統語的分布が様々であることを鑑み、不定詞句が主語項を要求しないようにする語彙規則を提案し、いくつかの種類の制御構文と繰り上げ構文の分析を試みたが、繰り上げ構文だけがそのような分析とうまく反り合わず、ここでもまた繰り上げ構文の特異性が明らかとなった。

6．参考文献

(一次文献)

Däniken, Erich von (1990): Die Spuren der Außerirdischen. München.

Dominik, Hans (1994): Der Befehl aus dem Dunkel. Augsburg.

Gercke, Doris (1990): Der Krieg, der Tod, die Pest. Hamburg.

Muschg, Adolf (1992): Ein ungetreuer Prokurist. In: Götz Silatan (Hrsg.), S. 333-344.

19 Kiss (1995, 1994) では制御構文の分析にも(27)のような、親文の主語が不定詞句に繰り下がるような語彙記述を用いているが、それはそこでの分析が親文の定形が versprechen の能動形のような、必ず主語制御となる制御構文だけを対象としているからで、本論で述べたように、制御構文の不定詞句の意味上の主語は文内にあるとは限らず、またあっても主語とは限らないことを考えると、(27)のような語彙記述では制御構文の統一的な説明ができないと考えられる。

Silatan, Götz (Hrsg.) (1992): Sommerferien. Frankfurt a.M.

Werfel, Franz (1992): Die Hotelterasse. In: Götz Silatan (Hrsg.), S. 345-359.

(二次文献)

Abraham, Werner (1983): The control relation in German. In: Werner Abraham (Hrsg.) On the formal syntax of the Westgermania. Papers from the "3rd Groningen grammar talks", Groningen, January 1981 (= Linguistik Aktuell 3). Amsterdam, S. 217-242.

Andrews, Avery D. (1990): Case structures and control in modern Icelandic. In: Joan Maling/Annie Zaenen (Hrsg.) Syntax and semantics 24. Modern Icelandic syntax. San Diego, S. 187-234.

Bech, Gunnar (1955): Studien über das deutsche Verbum infinitum. København.

Borsley, Robert D. (1996): Modern phrase structure grammar (= Blackwell textbooks in linguistics 11). Oxford.

Borsley, Robert D./Peter Suchsland (Deutsche Bearbeitung) (1997): Syntax-Theorie. Ein zusammengefaßter Zugang (= Konzepte der Sprach- und Literaturwissenschaft 55). Tübingen.

Ebert, Robert Peter (1975): Subject raising, the clause squish, and German scheinen-constructions. In: Robin E. Grossman/L. James San/Timothy J. Vance (Hrsg.) Papers from the eleventh regional meeting, Chicago linguistic society. Chicago, S. 177-187.

Eisenberg, Peter (1994³): Grundriß der deutschen Grammatik. Stuttgart.

Fujinawa, Yasuhiro (1997): Zur Identifikation des sogenannten logischen Subjekts beim deutschen zu-Infinitiv. In: エネルゲイア 22, S. 38-60.

Geerts, G./W. Haeseryn/J. de Rooij/M. C. van den Toorn (Hrsg.) (1984): Algemene Nederlandse spraakkunst. Groningen.

Helbig, Gerhard/Joachim Buscha (1991¹⁴): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Berlin.

Hoeing, Robert G. (1994): Empty, expletive, and missing subjects in German (= Berkeley insights in linguistics and semiotics 11). New York.

Kasper, Robert (1994): Adjunct in the mittelfeld. In: John Nerbonne et al. (Hrsg.), S. 39-69.

Kathol, Andreas (1994): Passives without lexical rules. In: John Nerbonne et al. (Hrsg.), S. 237-272.

- Kiss, Tibor (1995): Infinitive Komplementation. Neue Studien zum deutschen Verbum infinitum (= Linguistische Arbeiten 333). Tübingen.
- Kiss, Tibor (1994): Obligatory coherence: The structure of German modal verb constructions. In: John Nerbonne et al. (Hrsg.), S. 71-107.
- Köpcke, Klaus-Michael/Klaus-Uwe Panther (1991): Kontrolle und Kontrollwechsel im Deutschen. In: Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 44.2, S. 143-166.
- Nerbonne, John/Claus Netter/Carl Pollard (1994): German in head-driven phrase structure grammar (= CSLI lecture notes 46). Stanford.
- Netter, Klaus (1994): Towards a theory of functional heads: German nominal phrases. In: John Nerbonne et al. (Hrsg.), S. 297-340.
- Pollard, Carl (1994): Toward a unified account of passive in German. In: John Nerbonne et al. (Hrsg.), S. 273-296.
- Pollard, Carl/Ivan A. Sag (1994): Head-driven phrase structure grammar (= Studies in contemporary linguistics). Chicago.
- Pollard, Carl/Ivan A. Sag (1987): Information-based syntax and semantics. Volume 1: Fundamentals (= CSLI lecture notes 13). Stanford.
- Ruzicka, Rudolf (1994): Gegen die Aufgabe von PRO. In: Anita Steube/Gerhild Zybatow (Hrsg.) Zur Satzwertigkeit von Infinitiven und small clauses (= Linguistische Arbeiten 315). Tübingen, S. 13-18.
- Ruzicka, Rudolf (1983a): Autonomie und Interaktion von Syntax und Semantik. In: Rudolf Ruzicka/Wolfgang Motsch (Hrsg.) Untersuchungen zur Semantik (= Studia grammatica 22). Berlin, S. 15-59.
- Ruzicka, Rudolf (1983b): Remarks on control. In: Linguistic inquiry 14.2, S. 309-324.
- Sag, Ivan A. (1997): English relative clause constructions. In: Journal of linguistics 33, S. 431-483.
- Sag, Ivan A./Lauri Karttunen/Jeffrey Goldberg (1992): A lexical analysis of Icelandic case. In: Ivan A. Sag/Anna Szabolcsi (Hrsg.) Lexical matters (= CSLI lecture notes 24). Stanford, S. 301-318.
- Shannon, Thomas F. (1987): Aspects of complementation and control in modern German. The syntax and semantics of permissive verbs (= Göppinger Arbeiten zur Germanistik 424). Göppingen.
- Underwood, Nancy L. (1997): A typed feature-based grammar of Danish. In: Nordic journal of linguistics 20, S. 31-62.

Wechsler, Stephen (1997): Prepositional phrases from the twilight zone. In: *Nordic journal of linguistics* 20, S. 127-154.

Wegener, Heide (1989): „Kontrolle“ — Semantisch gesehen. Zur Interpretation von Infinitivkomplementen im Deutschen. In: *Deutsche Sprache* 17, S. 206-228.

Wyngaerd, G. J. V. (1994): PRO-legomena. Distribution and reference of infinitival subjects (= *Linguistic models* 19). Berlin.

甲斐崎 由典 (1998) 「制御構文の不定詞句の扱いについて」, 岩井方男 (編) 『大木健一郎先生追悼論文集』所収、東京、69 ~ 81 頁。

川島 淳夫 (編) (1994) 『ドイツ言語学辞典』, 東京。

人見 明宏 (1992) 「相関詞 es の統語論上の位置づけについて」, 『Angelus Novus』20 所収、60 ~ 77 頁。